

①これも今は となつて のことだが、 昔、絵仏師良秀といふ いう 者が あり たそうだ けり。

②家の隣より火 自分の の家 火災 が 発生し 出で来て、風おしおほひて 覆い被さる が ように吹い 火が 迫つてきた ので せめければ、

良秀は 逃げ出で、大路へ出でにけり。

③人の描か ある 良秀に 描か せた 絵の 家の中に いらつしやつ た する 仏もおはしけり。

④また、衣 着物を ない 着ぬ 妻子なども、さながら そのまま 家の 中 い 内にあり た けり。

⑤それも 良秀は そんなこと 構わ 知らず、ただ逃げ出で 逃げ出し た の よい たるをことにして、

大通りの 向こう 向かひの 側 立つ ている つらに立てり。

⑥見れば、すでにわが 見る と 火は 自分の 燃え 移つ 家に移りて、煙 や が くすぶりだし 炎くゆり て火がおさまつ た ける

ころ 良秀は ほとんど まで、おほかた、向かひの 向こう 側 立つ つらに立ちて、眺め た ところ ければ、

⑦「あさましき 大変な だ 言つ こと。」とて、人々 人々 が 来とぶらひ 見舞いに来 た けれど けれど、 良秀は少しも 慌て ない さわが ず。

⑧「いかに。」と人言ひ どうしたのか ある 言つ た ところ ければ、 向こう側 立つ 向かひに立ちて、

家の が 焼ける の 焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひ 笑つ た けり。

⑨「あはれ、しつる ああ 大変な もうけもの をしたこと よ せうとく かな。

⑩ 年ごろは 長年の間 わろく 下手に 描きける 絵を もの 描いた かな。 だなあ と言ふ 言う ときに、

⑪ とぶらひ お見舞い に ハ四 たる たち 者 は ども、 これ 「こ どういうことか は いかに、

かくて 良秀は は こうして 立ち 立って たまへ おいでな る のか ぞ。

⑫ あさましき あきれた こと だなあ かな。 あやしげな霊 もの が 取り憑き なかつ た か。

と言ひ 言つ ければ、 た ので

⑬ 「なんでふ どうして もの あやしげな霊 の が 取り憑く はずが あり か。 ぞ。 いや、取り憑くはずが無い。

⑭ 年ごろ、不動尊の火炎をあしく 長年来 描きける 下手に なり。 描いた のだ。

⑮ 今見れば、 この火を かうこそ と 燃え 火というものは けれ ていた なあ と 心得 悟つ つる た なり。 のだ。

⑯ これこそせうとくよ。 もうけもの この道を立て （「仏画を描くことの道」専門とし て 生計を立てる 世に から あらむ には、

仏だに だけでも よく 上手に 描きたて 申し上げた まつら ならば ば、 や 百千の家も出で きつと 来 建てられる なむ。 だろう

⑰ わたうたち お前さんたちこそ、 は させる これといった 能 才能 も お持ち合わせに おは なら せ ない ね ので、 ば、

ものをも なさるのだ 惜しみ 言つ たまへ。 あざ笑つ と言ひて、 立って あざ笑ひて た こそ 立てり けれ。

⑱ その 後 の か ち の に や、良秀が よぢり いつ 不動とて、 至るまで 今に が 人々 誉め合つ め ていた で 合へり。